

教 仏 名 聞

第8号
(発行日)

2011年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○共学会—毎月6日午後7時始

○真宗入門講座—毎月18日

午後6時半始

*8月22日の同朋の会と8月

12日の念仏座談会はお休み

この度の津波に思う

三月十一日(二〇一一年)

の地震に続く大津波によつて、あつという間におよ二万五〇〇〇人近い人たちが亡くなられた。自然の破壊力のすさまじさがテレビで何度も放映され、見てるだけで心が痛む。

F先生が「科学は自然の働きを説明しても自然の力を変えることも止めることもできない」と云われがその通りだと思う。これだけ科学が発達しても雨を降らすことも晴天にすることもできないし、台風一つも止められない。自然の力の前には人間の作為的な力ははなはだ乏しい。

今度の津波で、家を失い、仕事を失い、家族を失った人たち、さらに自分のいのちを失った多くの人たちがいる。亡くなられた人たちは愛する人を残していったどこへいかれたのか。人生は不条理や謎に満ちている。私たちは決して自明な

世界の中にいるわけではなく、不可解で、不思議で、謎に包まれた中に生きている。

こんなことを云うと、「そんなのんきなことを言つて場合ではない。生活を再建することが何よりの急務だ」といわれるかもしれない。実際、

こういう思いがけない出来事にてあつて、「さあまたがんばつて生活を元のようにしなければ。がんばるぞ」という人たちも多くいるであろう。

しかし一方、「人生とはいつた何なのか。私には何も分からなくなつた」という人々もいるに違いない。被災者たちの「いつたいこれからどうしたらいいのか」という多くの嘆きの声には「生きていくの意味が分からなくなつた」という思いも込められて

いるのはなからうか。現地の状況をテレビで見ている私たちは、生活の一切を奪つた津波を見て、被災を人ごとのように思い、「私たち

はまぬがれてよかつた」と思うかも知れない。

しかし、私の全生活を奪う「死」という津波は誰れかれなしにすべての人を必ず襲う。そのことを今から「想定」しておかねばならない。

ところが他者の死は当然としながら、「私が死ぬ」ことはともすると「想定外」にして「いつのことやら」とのんきを構えて、「死の津波」への用意をしない。もし死が災難であるとするなら、この世では「死以上の災難」は私に起こらない。津波も原発事故も死以上の災厄にはならない。

そんな「私の死」を今から間違いないことと想定して、死を超える道を今から知っておかねばならない。いな、知るだけではなくて、その道に今から帰入しておかねばならない。

しかるに、死を超える道は私が求めさえすれば、それは今ここにすでに与えられているのである。道はすでに提示されていて「汝、一心正念にして直ちに來たれ」と仏から

喚びかけられている。阿弥陀仏から「お願いだから、我が恵みをすぐ受けておくれ」とすでに喚びづめによびたもうているのである。ただそれを知らずに長く流転してきたのである。

死を超える道を「浄土に生まれる道」として釈尊は『仏説無量寿経』に説かれ、「阿弥陀仏に寄りかかれ、よりのめ」とお勧め下さっている。阿弥陀仏はナムアマダブツの音声となつて、私たちを久遠の昔から喚びづめによんで私たちを救おうとして下さっているのである。

『仏説無量寿経』には「無量寿仏の大音、一切世界に宣布して衆生を化したまう」と説かれている。大音とは南無阿弥陀仏の名号の音であり、阿弥陀仏の喚び声である。この喚び声に呼び覚まされて、「南無阿弥陀仏様が浄土に連れて行って下さる」とのお慈悲に遇わせていただく。

人生は不可解であり不条理に満ちていながら、しかし広大な大悲のまことに支えられていること、また死を超える道が与えられていることを知るのである。(了)

正信偈に学ぶ問答

(二十九)

釈迦如来楞伽山

為衆告命南天竺

龍樹大士出於世

悉能摧破有無見

宣說大乘無上法

証歡喜地生安樂

書き下し（釈迦如来、楞伽山にして、衆のために告命したまわく、南天竺に、龍樹大士世に出でて、ことごとくよく有無の見を摧破せん。大乘無上の法を宣説し、歡喜地を証して、安樂に生ぜん、と）現代語訳（釈尊は楞伽山で大衆に、「南インドに龍樹菩薩が現れて、有無の邪見をすべて打ち破り、尊い大乘の法を説き、歡喜地の位に至って、阿弥陀仏の浄土に往生するだろう」と仰せになった）

*

D 「正信偈のこの部分は『楞伽經』という經典に出てくる内容にもとづいて聖人が作られたものです。楞伽經の中に釈尊の予言された箇所があり、それによると、未来に

龍樹菩薩がこの世にお生まれ

になり、よく有無の見を破し

て、人のために我が大乘無上

の法を説いて、歡喜地を証得

して、安樂国に往生せん」と

説かれています」

G 「龍樹菩薩はいつどこに

生まれた方ですか」

D 「インド、それも南インド

にお生まれになりました。お

よそ紀元後一五〇年から二五

〇年の間の方といわれています

す」

G 「有無の見を摧破するとは」

D 「龍樹菩薩は有無にとらわ

れている見解を批判し否定す

ること、それによって正し

い見方を明らかにされたので

す」

G 「有無の見解とは」

D 「有の見方と無の見方にと

らわれていることです。有の

見方とはものが実体的に有る

との考えに固執する見解であ

り、無の見方とはものは実体

のない空無にすぎないとの考

えに固執する見解です」

えに固執する見解です」

G 「有の見をより具体的に

つしやって下さい」

D 「私という実体的な存在が

過去から今まで変わらずに存

在し続けている、これからも

あり続けるというような考え

です。私たちは何となく、何

十年も変わらぬ（私）があり

続けてきたと思っています。

小学校時代の私も青年時代の

私も老年期の現在の私も、一

貫して同じ私がずっと続いて

来たようにともすると思う。

そういうような思いは有の見

と違っていいでしょう。世の

中の人の一般的な思いは大体

有の見になっていると思いま

す」

G 「では無の見とは」

D 「これはどちらかという

思想的な邪見（間違った見解）

で、（私の存在は、本当には

存在しない夢や幻のようには

かない観念的なものである）と

い、空しいものである」とい

うような考えでしょう」

G 「有無の見をもう少しわか

しく云って下さい」

D 「たとえば目の前のローソ

クの火は実体としてあるかと

いえば、その火をつかんで手

に取ることはできません。つ

かめばないもので、実体とし

かめばないもので、実体とし

てとらえることはできません

ん。かといって火は単なる思

いであって無いものかという

と、ローソクの火は家をも焼

く働きがあります。また津波

にしても台風にしても、それ

を実体とし固定的なものとし

てとらえることはできません

ん。だから実体としては無い

ものです。では津波や台風は

観念的なもので実際には幻の

ように無いものかという、

家を壊し橋を壊し、人の命ま

でも奪う力があります。一つ

の現象は、固定的な実体とし

ては無いかから有ではないが、

かといって観念的な虚無であ

るかという現実的には確か

な働きとしてありますから無

でもない。それで龍樹菩薩は、

一切の現象は（仮ないしは空

である）と説くのです。また

有無の見はことに死後のこと

でよくいわれます」

G 「死後に対する有無の見と

は」

D 「人は死んで靈魂のような

実体として存続し、その実体

が輪廻するというのが有の見

であり、死んだらまったく無

くなって骨と灰が残るのみと

いうのが無の見です。凡夫は、

自分は死んだら一つの実体的

な靈魂として存続するように

思う（有の見）か、あるいは

死んだら終わりで何もなくな

るといふ（無の見）で考える

か、どちらかになってますね

現代人は生きてるときは有

の見であり、死後に対しては

無の見で考えている場合が多

いと思います」

G 「そうですね」

D 「有無の見は間違った考え

ゆえ有無の邪見といわれるの

です。こうした有無の邪見を

批判して（一切は無自性空で

ある）ことを明らかにされた

のが龍樹菩薩です」

G 「無自性空とは」

D 「いつまでも変わらぬ性質

を自性といいますが、一切の

ものにはそういう自性は無

い、それを無自性空というの

です」

G 「具体例で云って下さい」

D 「例えば本があるとします。

本とは読物という性質として

考えています。しかし読物と

いう性質を持つ本は何時でも

そうかという、縁によって

読物という性質になっている

だけであって縁が変われば読

物としての本ではなくなりま

す。たとえば、頭を置けば枕

にもなり、重しにもなり、焼

けばたき物にもなり、羊には

焼けばたき物にもなり、羊には

食べ物にもなり、棚の装飾

品にもなります。また本は変わらぬ自性としての実体があるかという点、その実、紙の集まりでしかなく、ほどけばもはや本ではありません。本は本でない机や座布団やテレビなどと区別するために人間が仮にそう名づけたただけです。また本は犬や猿にとつて本という意味はもちません。人間にとつてのみ本であるにすぎません。そこで本は本という変わらぬ、それだけで独立した性質はありません。そういう意味で縁によつて本と名づけたものではないから、確かでは変わらない性質があるわけではないので無自性空であるといわれるのでしよう。空とはなんでもないものという意味です」

G 「他のものでたとえて下さい」

D 「たとえば川だつて同じです。縁によつて川という意味をもつのであつて、縁が変われば川という意味は変わります。今は川であつても雨が降らずに水が流れなければ谷という意味に変わります。沢山の水が流れるという縁によつ

てはじめて川という意味があるのです。もし水が少しだと川と云わずに水路といひましよう。また川は川だけで独立的に存在することは不可能で、大地があり、谷間があり水がいつも流れているなどという条件（縁）によつて始めて川という意味が生まれま

す。川はそのように大池とか谷間とか水とかの縁の集まりで川といわれるのであつて、川という独立の実体的な変わらぬものがあるわけではありません。川は、海とか山とかに相對して仮に川と名づけただけです」

G 「川といえはそれだけで存在する川があると考えやすいですね」

D 「川という名前である（言葉）はいつまでも変わらぬようから、言葉が変わらぬように、言葉に應じたものが実際に実体的に存在するかのよう

G 「人間存在ではどうでしょう」

うか」

D 「人間存在を仏教では五蘊の和合したものであるといひ、身体的な要素である（色蘊）と精神的な要素である（受・想・行・識）の四つの蘊に一応分けます。その五蘊が仮に縁あつて集まつているものが人間存在であつて、実体的恒常的な存在ではありません。また色受想行識の五つの蘊が仮に集まつて存在しているかぎり単に無ではあり

ません。柱や屋根や床や窓などが集まつて仮に家だといつていただけで、家というものが実体として有るのではあり

G 「有無の見とか空について、少しわかりました。次ぎに大乘無上の法を宣説されたといわれる大乘無上の法とは」

D 「大乘とは全ての衆生を覺

りの世界に至らしめる大きな乗り物という意味で、一切衆生を大涅槃に至らしめようとするこの上ない教えが大乘無上の法です。それを龍樹菩薩は『十住毘婆沙論』の（易行品）に本願念仏の法として説かれたと親鸞聖人は見られたのです」

G 「龍樹菩薩ご自身は本願念仏の教えで救われたのですか」

D 「龍樹菩薩は自力の修行で歡喜地という境地に達せられた云われています」

G 「歡喜地とは」

D 「仏の覺りに初めてふれた境地で、もはや二度と迷いの世界には戻らないという、そういうよろこびが初めて起こる境地のことです」

G 「自力の修行で悟つたお方が大乘無上の法としてなぜ本願念仏を説かれたのですか」

D 「ご自身は厳しい自力の修行で迷いを脱しても、一切衆生が迷いの世界に退転しないという不退転の位（歡喜地）に至るにはどうしたらいいのかを自分の問題とされたのだと思ひます。そこに本願念仏の法を見出され、すべての

人はこの本願念仏の法を信じ

るばかりで歡喜地に至り、安樂国に生まれることができる

G 「龍樹菩薩が（一切は空であつて自性はない）と明らかにされたことと、本願念仏の法を説かれたこととはどうい

う関係があるのでしようか」

D 「一切は空であると完全に悟つたのが仏ですが、それ

は非常に難しい道でありましよう。ところがいかなる人も阿彌陀仏の本願を信じ念仏申す易しい道によつて不退転の位に至り、やがて安樂淨土に生まれて仏の智慧を完成することによつて空を完全に悟ることができると見られたのではないでしようか。こうして本願念仏の教えこそ大乘の中

お念仏に遇う

以下は「花すみれ」(大谷婦人会発行)二〇一一年二月号に載せられた文章を転載したものです。

【自心が問題となる】

聞くところによりますと、十四才という年頃は「人生とか自分自身の問題になる」最初の年齢だそうです。確かにそうだなあと思うのは、私が

自分の心を問題にしはじめたのがこの頃でした。中学二年の頃は、ずいぶん勉強に励んだ時期で、成績もぐつと上がり、親も喜び自分も嬉しかったのでした。ところがいくら勉強しても、それ以上に成績優秀な生徒が当然いましたので、その子に対してねたみ心が起きたのです。ところが、その子の存在がイヤだと思っても、自分の嫉妬心そのものが実にイヤでした。「ねたみ心はなんてイヤな心だろう。この心はたとえ大人になっても起ころう。それなら一生、この心に悩まされ続けるだろう。このイヤな自分の心をなんとかしたい」と思いました。

自分が自分の心に対して悩みはじめたのはそれが最初でした。この苦しみは高校になっても続きました。こうしている内に、もっと深刻な心の問題が起こりはじめました。それ

は自分の内心と外の世界とが分離されたような感じになっていったのです。自分と、世界や社会や人々との間が透明なガラスでさえぎられたような感じになり、その分離意識が一日中続いて、毎日がうっとうしくてたまらなくなりました。

【お念仏にあう】

そんな問題があつて、宗教の本を読むようになり、高校一年の時にはキリスト教会にも通いました。その後仏教に触れて坐禅のまねごとなどをしていましたが、高校三年の時、真宗にひかれるようになりました。二学期の頃、金子大栄先生の本の中で、「念仏は苦悩を除く法である。苦しかつたら念仏申せ。阿弥陀仏は「我が名を称えよ」と仰せられている」という趣旨の言葉に「あ、初めて口にナムアマミダブツと称えるようになりました。そうすると、何かホッと肩の荷がおりたように感じ、心が少し軽くなりました。これはいいぞ」と思い、さらに真宗の教えを学びたいと思つて、親の反対を押し切つて大谷大学に入りました。

こんなことから、生まれは寺の出身ではなかったのですが、次第に真宗の世界に入つていきました。その

間もずっとお念仏を申すことは続きました。というのは、うっとうしい心だけではなく、さまざまな煩惱の心が起こつて心がつまると、「我が名を称えよ」(その心のまま称えるばかりでよい)の仏語にうながされてお念仏を申していったのです。いつでもどこでもだれでも、心の状態のいかんにかかわらず、今ここで「ナムアマミダブツ」と称えることができる、というお念仏の易しさにひかれてのことでした。もちろんお念仏の真意をいまだ了解してはいなかったのですが、苦しい心が起こつてやまない私には「その心のまま今ここで称えるだけでよい」というお念仏の道は当時の私が歩めるただ一つの道でした。

こうして念仏を称えつつ、お念仏のいわれを聞いていきました。しかしうっとうしい心はずっと続きました。

【大悲心をいただく】

ところが三十八才の夏のことでした。当時、私は鹿児島県にある離島で住職代務をしていました。悶々とした日々が続いていた真夏の夕暮れ、風呂から上がつて、涼みながら何気なしに法話のテープを聴いていました。その法話の中で、「凡夫の心はさびた鉄のようなもので、仏法を聴いてもちつとも信じない奴である」と聴かされた時、まさにそれが私のこゝとと感じた瞬間、「そんなお前だから」

「まるまる引き受ける」との大慈大悲のお心が全身に響きました。不思議ですね。それからというもの、真宗の教えが非常によく分かるようになったただけではなく、長年苦しんできた心の内外を分かち分断感がとれて、外の自然の光景がリアルで美しく感じられるようになりました。

そして嫉妬心などの煩惱の心に大悲の心がひつついて下さり、今もお盛んに起こる煩惱は、実にあさましくもうしわけないことですが、仏の大悲を喜ぶ種になつて下さいます。だから煩惱がありながら、これに悩乱されることはなくなりました。

高校の時に、「我が名を称えよ」という仏語に接しましたが、その当時はその真意は分からず、「称える」行為に力点をおいていました。ところが「称えよ」は「助ける」(引き受ける)の大慈大悲の思召しそのものでした。それが長いこと分からなかったのです。

けれども今思えば、自力の念仏であらうと称えてきたお念仏の中に、「我が名を称えるばかりでよい」とまで仰せ下さる広大な仏心大悲がこもっていたのです。その大悲心が時いたつて私の心に流れ込んで、信心になつて下さつたのだと思います。宗祖の御和讃に「弥陀の名号称えつつ信心まことにうるひとは」とあります。実際その通りだと思ひます。